## 紹介

◎方寸畫暦　昨年江湖の大歡迎を受けたるものにして、四十三年分には未醒、繁二郎、鼎、白羊、柏亭、一磨、百穂、恒友の諸氏各々獨特の筆を揮へり、暦としての便利は一のカレンダーに及ばされど、其繪は趣味横溢、才人の集まりを以て目されたる方寸社同人の奇警なる觀察を窺ふに足るべく、新春机上の珍たらん（一部二十五錢、本郷區駒込千駄木林町方寸社）

## 問に答ふ

■一　遠景中景近景の松の描法二　日出の時の曉雲及空は如何なる彩料にて畫くべきや三　輪廓を大なる線にて描きたるものあり何描法といふにや四　圖案と模様の區別五　日本人の編著したるものにて挿繪多く初歩の者に適當なる書籍ありや（福岡、白羊）◎一　松の描法を説く事は詳しく言へば本誌一冊分も要すべし『最新水彩畫法』には描法及松についての講話あり就て見られよ、要するに松に限らず遠景はぼんやり、中景はやゝ判然と、近景にあるものは正しく明らかに畫くといふだけの事なり、時として遠景のものと雖も幹一本々々明らかに見ゆることもあらん、其儘明らかに現はして畫いてよけれど、かくすれば近景のものは松の葉一本々々畫かれば調子が合はず、それ故遠いものは極大タイの形と色とを見て畫く、漸く近づくに從つて判然と寫すべし、總じてかゝる問を出す前に、充分他人の作なる松の畫を見て自分も實地につき研究し其上如何にしても了解出來ぬ點を質問するやうにせられたし、自分の研究なしに漠然と問ふたのでは、タトヘ滿足の答を得ても利益あらざるべく、結局不得要領に終るべし二　前の問と同じ事にて春夏秋冬同じからず、又同季節にても多少の霧のある日、風のある日、雲もまた多き時と少なき時によつて其感じも違へば、色も異なり、隨つて繪具も同じからず、是も實地及他人の作で研究せられるより他に道なし三　アールヌボーのことならん四　志奈地氏の『圖案法概要』に「圖案は衣食住に關する總ての物品を製作する工藝品に適應するやう模様、形狀、色彩を考按して趣味ある着想を表示したものである」といてふある、これで見ると模様は圖案に含まれてゐるものであつて、其一部と云ふてよいであらう五　何の書の事なりや不明■一　『みづゑ』三十號の『故郷の秋』は丸山先生何歳頃の作にや、また大さは如何二　研究所に入り專門に研究するに十八歳にては遲きや三　日本現代の風景畫家にて成功せし人は誰なりや四　吉田藤尾女史は何人にや（榎本生）◎一　三十五六歳頃、ワツトマン四切二　年齡の早晩によらず勉強次第なり、可相成は中學校卒業後がよろし三　程度問題なれどかゝる事は御答の限りてない四　吉田博氏夫人なり■一　木炭畫の研究は如何にしてよきや、若し石膏のモデルがよければそれは如何なるものを求むべきや二　五十八號廣告にあるニユートン社の出版物は、英語の學力がどれ程あれば讀み得べきや（紫水）◎一　木炭